

フィールドワーク方法論講義ノート

How To Practice a Field-Work

片 茂永

Pyeon Moo Yeong

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

1. なぜフィールドワークをやらなければならないのか

近年、文献情報と現場情報とのずれは大きくなるばかりである。例えば、図書館における過去の産物としての文献情報と、今の現場状況、それに加えて、情報の信憑性がこの頃よく社会問題になる等、情報を巡る諸環境が錯綜している。政治や経済界はさることながら、私たちが日ごろ所属している大学においてもそのような状況にあまり変わりはない。研究が求められるほとんどの分野がそうだとはいえるかもしれない。文献とともに、現場への探求がさらに問われる所以である。

フィールドワークを言い表すような言葉、例えば、現地調査・下見・取材・採取・探査等は、常にある現場の〈今〉からスタートする。人文科学・社会科学、自然科学等ほとんどがそうである上、一般社会の企業も例外ではない。〈今〉をもっと正しく理解するために文献を紐解いたり、明日へのさらなる発展のために〈今〉の問題を一層深化したりしていく。従って、フィールドワーカーの心眼はいつも〈今〉に存在し、そこから過去・現在・未来を観念していくのである。

このような局面への正しい認識の下、物や人、制度、自然など、諸環境の変化に伴う現状把握への知的欲求は年々高まっている。

2. フィールドワークの準備と実践

2-1. 調査計画を立てる

1人調査を想定した計画や組、班、または調査隊全員による団体調査計画等があるなか、大学生たちの卒業研究論文は基本的に1人による調査研究が一般的である。従って、いずれの調査であるにせよ、調査計画はフィールドワークを予定している人にとってはまず考えなければならない最初のステップである。調査の対象は何かとともに、そこから何を明らかにしたいのかを順に考えなければならない。つまり、調査の目的ともいえるもので、研究論文にレベルアップしていくためには最初に通らなければならない関門

ともいえるかもしれない。調査報告と調査研究との違いも実はこの問題と深く絡んでいる。

まず、いつ、どこで調査するのかを決めなければならない。調査内容によっては特定の時期でないといけない場合や、いつでも構わないような場合がありうるし、調査地域も調査時期に拘束される地域と、いつでも調査が可能な地域がある。例えば、祭りをはじめとするほとんどの無形文化は時期に制限される場合が多く、有形文化はその反対の場合が多い。

また、調査地に入ってから誰に会うのかという問題もあらかじめ考える必要がある。即ち、話者の問題は、直接情報、間接情報、偽情報、軽い情報等の情報の質の判断や分析と密接に関わってくるからである。話者(情報提供者であり、語ってくれる者。Informantとも)と情報との距離感は、情報そのものは勿論のこと、調査内容や調査目的とも関連している。さらに、話者の性別や年齢、学歴、出生地域、成長地域、人間関係、趣味生活、性格など、すべてが話者を判断する際の重要な材料である。記憶力がよくてお喋りの人が私たちにとっての立派な話者であることというまでもない。しかし、調査で分かった話者情報は、個人情報でもある場合が多いので、その取り扱いには十分な注意が必要であろう。

調査期間はどれぐらいにするのかも重要な問題だが、次の3段階の調査と連動しながら考えなければならない。つまり、基本的には基礎(地表)調査(下見)、本調査、補足調査に分けて計画を立てるべきだが、調査内容や地域によっては、そのような基本が守れないケースもあるので、全体の調査計画は諸々の条件や環境を勘案しながら慎重に立てなければならない。しかし、愛知大学が実施している国際フィールドワークは、初めから15日間と決まっているので、この期間内で報告書作成のための有効な情報入手し、なおかつ分類しておかなければならない。分類以前の採集内容はただの世間話のようなもので、分類以降のそれがはじめて有効情報として位置づけられる。即ち、大学の授業が求めている学術的な情報というのは、分類の施されたものを意味する。

次の計画段階で考えなければならないのは健康問題である。日頃からの健康状態だけでなく、体質にも注意を払う必要がある。つまり、いくら健康な身体を持ち主だとしても、調査地域の気候や環境、または地元の飲食等によっては、適応に困難な体質だったり、慣れるまでかなりの時間がかかったりすることがしばしば起こる。深刻な持病を患っている人は論外だが、軽い生活習慣病を抱えている人なら、調査予定地域の環境については充分調べてから調査計画を立てていただきたい。

1人調査か2人以上の共同調査かの判断も基本的には調査内容によるが、いずれにしても、補助員を必要とする場合も考えられるので、この問題は安全確保のためにも極めて慎重に判断しなければならない。例えば、言葉があまり通じない地域に入る調査者は

通訳と同行する必要があるが、紛争地域や宗教的にとても厳格な地域に入る時でも、現地人に案内してもらったほうが望ましい。

2-2. 関連文献を読む

調査計画を立てる段階でやらなければならないもう一つは、関連文献を読むことである。

調査予定地域に関する既存の報告書や何かの記録物のような第一次資料をはじめ、それに基づいた研究論文にいたるまで、基本文献の把握に手落ちがあってはならない。

なかでも、フィールドワーカーが事前に調べないといけない文献で何より重要なのは、地図である。最新の地図を入手して携行するのは言うまでもないが、文献として熟知しておかなければならないのは過去の地図である。つまり、昔から現在に至るまでの地図の移り変わりを理解するのは、地元の歴史関連文献を読む以上に価値がある。歴史という時間の展開を空間の上に置き換えて理解するのは、これからの実地調査を行なうに当たり、立体的な座標を手に入れたことに等しい。

2-3. 調査道具等

2-3-1. 衣食住薬について

衣類は、現地の気候に適したものを選ぶのは言うまでもないが、何より大事なのは、調査地域においてあまり目立たない衣装を着ることである。スタイルや色具合、どちらもそうであるが、目立ちすぎると余計な注目的になってしまい、周辺からの視線は調査にとってあまり為にならない。場合によっては、地元の普段着に挑戦してみるのもいいかもしれない。

食についても、無理をしない限りでは、地元の食を楽しむのも良い方法であろう。さらに、現地の人々に溶け込むためには、村人の住居に住んでみるのもいいが、調査者の健康状態等によっては、ホテル暮らしもやむをえない。

自分の常備薬は必ず事前に用意し、調査地域では常に携行するよう心掛ける。愛知大学の国際フィールドワークでも、ちょっとした失敗談は何回かあるので、健康管理については参加者一人ひとりのしっかりした自覚がまず求められている。

2-3-2. 資料収集及び記録のための道具と使い方

調査地での歩き方ある程度拘束する反面、安全確保のための道案内にもなれるものに地図がある。紙媒体の地図を常に携帯していた20年ほどの前までは、1/200,000の地図や、1/100,000地図、1/5,000地図、または住宅地図のなかから自分の調査に一番適した地図を二つか三つぐらいは大体所持していた。車の移動に便利な1/100,000地図や、

村の概観を眺望するのに役に立つ 1/5,000 地図、または住宅地図は必携品だった。今では、グーグルマップという便利な地図とスマートフォンの新登場以来、紙媒体の地図の固定性に依存する人は少なくなったが、いくら時代が変わっても、私たちの調査活動に無くてはならない地図は、調査者自らが作成した地図である。

調査者の地図こそ調査者をフィールドワーカーたらしめる専門性の高い調査道具の一つである。フィールドワークの全容は調査者の地図に圧縮された形で残されるといっても過言ではない。計測用の巻尺や座標等を把握する上で役に立つ方位磁針も地図とともに便利な調査道具である。例えば宗教や民間信仰、または建築関連の調査をする時に特に力を発揮してくれる。

記録道具はいろいろ考えられるが、まず調査の現場ではカメラや録音機、調査ノートが必携品である。調査ノートについては、例えばインタビューの内容は録音するという前提なので、キーワード中心の記録で充分である。つまり、録音内容は宿にもどってから文字起しをすることになるし、その際の確認事項がメモしてあればいい。文字起しの記録こそいわゆる聞き書きのノートであるので、携行する調査ノートはそのための補助手段である。ただ、スケッチのためには白紙の調査ノートを別途用意した方がいい。

一方、その日の調査を終えて宿に戻ってからの調査記録としては、調査カードと調査日誌の二通りある。中でも調査カードは、フィールドワークの全過程において要諦である。調査カードは、調査の効率性を高めるだけでなく、調査内容の分類や報告書作成のためにもなくてはならないものである。調査カードの作成におけるコツは事実だけの記録であることで、感想のような主観の記録が許される調査日誌とは大きく区別される。そのサンプルを示すと、〈図 1〉の通りになる。

〈図 1〉調査カードの例 サイズ B6

調査内容の 主題語	調査年月日	①
	調査場所	
	調査者名	
	(以下、調査内容の主題語について記述する。)	
キーワード	調査内容の記述	
キーワード	調査内容の記述	

以上のように、調査カードは情報伝達の六つの基本要素、即ち、いつ・どこで・誰が・何を・なぜ・どのように（5W 1H）に該当する記事だけを記録するのが原則である。それ以外の事実関係、または調査者の主観が現れるような形容詞は極力避けて、数字をもって書き記せるように調査の段階から精緻な観察が求められる。

＜図2＞調査日誌の例 サイズ B5

区分	市						年 月 日
	話者	氏名	性別	年齢	生業	出身地	居住地
調べた物	現地語	解 説					
調査内容及び感想						
						
						
						
						
						
						
						
						
						

それに比べて、調査日誌（図2）は調査にまつわる経緯や新しい発見内容に対する感想等、さまざまな経験が記されるので、調査カードとは雰囲気が一変してしまう。客観的な調査内容は書いてはいけないのかということも必ずしもそうではないが、あくまでも調査者の歩き方や考え方を記するのが主である。それで、調査カードと日誌の二つを正しく書き分けるか、または報告書とかで正しく使い分けることができる人は、いわゆる‘民族誌’や‘生活誌’記述のための基本ができていると言えるようになる。

その他、ノートパソコンやスマートフォンのような機器類も今時のフィールドワークでは依存度が高まりつつある。なかでもスマートフォンは、現地での SNS や地図、交通、検索、カメラ、録音等の諸機能の集約性によって、特に大学生のあいだでは使用範囲が広がっている。

2-4. 訪問先の選定と訪問要領

誰に会うのかに連動して、訪問先についても出発前から考えておかなければならない。さまざまなフィールドワークの中には、事前連絡のないままぶらぶらと歩き回る調査方法もあるが、これは大学の授業が想定するフィールドワーク方法ではない。人類学や民俗学を専門とする学科は別として、一般教育としては、事前に連絡を入れておいてから現地いきるのが普通であろう。街頭での簡単な質問を除けば、ほとんどの調査はどこかを訪れるので、訪問について了承いただくことにおけるメリットやデメリットについてもいろいろ自覚したほうがいい。

なお、訪れる時の服装や携行品についても、出発前から考えるのが自然である。場合によっては、話者への記念品を用意しなければならないときもある。調査の効率を図るためだが、地元の人に日頃使ってもらえるような簡単なものを手渡すのが無難であろう。ただ、これにもメリットやデメリットがあるので、専門家との相談が必要なところであろう。

2-5. インタビューの基本要領

2-5-1. Free Talking と Interview

調査者と話者との話し合いについては、Free Talking と Interview に分けて考えるのが一般的である。まず前者は、トピックがないまま普通の世間話を交えながらの話し合いと、トピック有りの自由な話し合いに分けて考えられる。どちらも時間はかかるが、トピック周辺 of 諸々の事情についても幅広く聞けるという大きなメリットがある反面、話題が大きく逸れないようにするためには、ある程度の専門性が求められる。場合によっては、話題をさりげなく誘導する必要もあるので、そのためには多様な知識が役に立ち、さらには現地語を自由に話せないといけない。

後者の Interview は、インタビュー、聞き書き、質疑応答など類似の言葉がいくつもあるように、一般人のあいだでもよく知られている上、愛知大学の国際フィールドワークにおける調査方法にも大半はインタビューが含まれている。

さて、インタビューの中にも、事前に質問項目を定めてから進めるのと、話し合いの流れに任せるインタビューが想定されるが、国際フィールドワークの授業では質問項目を用意してからのインタビューが多い。国際フィールドワークは海外での野外授業なの

で、地元の人と自由に話せる学生が少なく、現地の大学生に通訳してもらいながらの話し合いが多いからである。

質問項目が書かれたメモの取り扱いについても、繊細な配慮が必要である。話者に見られることによって、微妙な心理的緊張感が漂うことになり、何となく見せかけや上辺の情報しか得られないケースもある。調査者と話者の関係は、短い時間に演出された一つの時空間であることに直視し、登場人物たちの心理状態まで観てほしいのである。

2-5-2. 話者に関する諸事項について

調査計画を立てる段階から、フィールドワークを予定する人は当然ながら話者に関する様々な事柄について調べることになる。したがって個人情報管理規定や倫理問題などいろいろ考えなければならないが、それに付け加え、実際に調査を進めていくと新たに分かったこともさらに増えていく。これらの話者情報は、話者が提供する情報の質を判断する上で貴重ではあるが、取り扱いにおいてミスは許されないとこである。

2-5-3. 周辺的环境にも注意を払う

話者の生活環境だけでなく地域の自然環境も、資料の分析や理解の上で必要である。昔の地図を解読することや周辺的环境を理解するのは、調査結果を総合的に理解する上でなくてはならない土台なのである。一時的な訪問客よりは、現地に滞在する生活人としての調査者のほうが奥の深い調査ができるのも、総合的分析や理解が可能だからであろう。したがって、国際コミュニケーション学部が実施している海外でのフィールドワークは15日間という制約があるので、このような限界や問題点を勘案した上で、どうすれば調査成果をあげることができるのかについていろいろ工夫する必要があるだろう。

2-5-4. 誘導質問はいけないのか

調査環境や話者によっては、誘導質問がやむをえない場合もある。例えば、地域情報はたくさん持っていても、そもそも無口な人からはなかなか有意義な話が聞けない。その反面、明るくてお喋りの人でも、あまり役に立ちそうな情報を持っていないこともある。そのような場面につづった調査者はだいたいいらす。滞在時間の制約があるからである。そんな時には、調査者が対話を主導しない限りにおいて、話者をしていろいろ語らせるための誘導質問をすることになる。具体的な要領については、例えば韓国フィールドワークの場合、フィールドワークの現場に立脚しての現地指導を原則としている。

2-5-5. 調査者の身分を明かす場合と明かさない場合

経験豊富な人類学者なら、身分を明かさなくても、知りたい事柄についてさりげなく現地人に語らせるような調査方法を採用することもしばしばある。調査者の身分について、地域の人なら誰でも知っているケースもあるが、これがいつでも正しいとは限らないので、そのメリットやデメリットにも注意を払う必要がある。

2-5-6. 調査道具をどうするか

インタビューの最中に、録音機、調査ノート、カメラ等を使うのは当たり前だと考える人が多いが、現実的には必ずしもそうではない。状況にもよるが、わざわざ何も出さずに行うこともありうる。それは、回りを緊張させたくない等の理由からであって、それで調査道具は何ひとつ出さないほうがいいと思ったからであろう。調査者が直面した場面がはたしてそういう局面かどうかの判断は微妙なところもあるが、とにかく、大学生のフィールドワークでは、調査道具を十分に使いこなせるように、日ごろからその使い方を習得しておくべきであろう。

2-6. 複数の話者と話をする場合

調査者1人が複数の話者を相手にインタビューをする場合もあるので、その特徴についてまず理解しなければならない。数人から幅広く話しが聞けるので、多面的な理解ができるのは言うまでもないが、そのためには、話が筋道から逸れないようにするための高度な技術が求められる。順調にいけば、調査内容の全容を再構成するのにとても役に立つ方法である。

成功するためには、調査者はまず心理的な安定感が重要で、ゆっくりとあせらず、対話の遠回りの運び方も辞さない余裕が第一である。そして、話者らの話し合いに入ったり出たりのテクニックも大事だが、そこで交わされた話しの情報をもれなく記憶するのは簡単ではなく、どうも録音は必須となろう。しかし、複数の人々による録音なので、文字起しは特に難しくなる。

一方、複数の話者を相手にしながらも、質疑応答の方式によって、一筋の話題に絞って行なう聞き書きもある。ただ、短時間でたくさんの情報は得られるが、浅い情報という限界は避けられない。

3. アンケートの調査方法

アンケートによる調査は、インタビュー調査とは相互補完的である。インタビューというのは、結局、話者の記憶を引き出して語らせる対話法であろう。しかし、この調査方法は話者の記憶における流動性によって、いつも完璧な方法とはいえない。話者の潜在意識や奥の心理まで窺えるという大きなメリットとは裏腹に、具体的な事例に対する

記憶の曖昧さは、聞き書きの限界といえるかもしれない。

アンケート調査はインタビューの弱点といえる部分について、具体的な質問項目を作成したアンケート用紙を多くの人々に配布し、記入してもらってから回収する調査方法である。質問に対する答えは、幾つかの選択肢から選んでもらうか、簡単に記述してもらうかなどアンケートの方式にもいろいろある。さらに、調査結果の客観性を保つためには、調査対象を性別・年齢・学歴・出身地及び居住地別に区分することへの工夫やそれぞれの人数のバランスなど、考慮しなければならない問題がいくつかある。

質問紙を回収したあとは分析の段階であるが、ここで注意しなければならないのは、基本的にはアンケート結果をして語らせるような分析であるべきで、調査者の意見や主観をもって自由に分析することではないということである。アンケート結果を語らせるような分析というのは、データが許す限りでの分析という意味であって、その一線を越える意見が入ってしまうと、アンケートの客観性があせることになるので、要注意であろう。

4. 調査結果の整理と分析

4-1. 調査カードの分類

調査カードの作成については既述したとおりであるが、作成されたカードは日々増えていくので、分類作業はだんだんと当たり前の日課となってくる。〈図1〉カードの左上段に“調査内容の主題語”とあるが、これは分類のための基準でもある。もし、同じ調査内容の主題語について、解説が予想を超えて、①ページでは収まらない場合、②ページに続く。このように、同じ主題語や近い主題語のカード同士をグループごとにまとめる作業をしなければならない。調査者が予め決めていた調査テーマと、下位の主題語ごとのグループに収まるカードが、例えば1日3枚以上書けるなら、調査者としての自主的なノルマは達成できたと言ってもいい。

ところが、1日3枚以上のカードが書けたとしても、調査テーマや主題語にそぐわず、カード同士の繋がりが弱い場合は、分類への一貫性がないので、まとめた調査結果にはならない。つまり、調査が始まって終わるまでのあいだ書き上げた調査カードのすべては、当然ながら相互間にリンクされているはずで、いくつかのグループに所属されるのが望ましい。例えば、10日間の調査なら、1日3枚ずつのカードを作成していくと、トータル30枚程度の調査カードが手に入ることになる。そして、いくつかのグループは、そのままレポートにおける章や節を構成することになるので、まさに報告書の7割は、調査地の宿で終わるといっても過言ではないのである。

4-2. 写真の分類

写真も調査テーマの下位グループにあたるいくつかの主題ごとに分類しておかなければならない。分類を経て初めて調査資料としての価値があるからであろう。20～30年前のようなフィルム時代とは大きく異なり、今頃の調査ではデジタル写真が中心なので、データのまま保存することができるし、方法もさまざまある。中でも特にお勧めしたいのは、パワーポイントで編集をしておくことである。

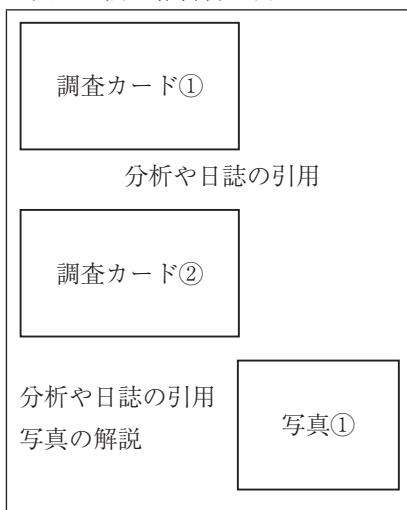
これは、特定の写真に対するすべての情報をもれなく覚えるのが日々難しくなるのが一番大きな理由であろう。例えば、市場を歩きながら食文化について調べた場合、撮れた写真が多ければ多いほど、どの食堂や屋台で撮影したのか記憶が定かでないのがしばしばあり、記憶力の限界を補うには、やはりパワーポイントのメモ機能を使うのが有効である。他にも、写真整理に役に立つアプリはいくつもあるので、自分に合うものを選ぶことが求められる。

5. 報告書の作成と公表

5-1. 報告書における調査カード、調査日誌、写真について

調査を終えて、住み慣れたところに戻ってきたとしても、休む暇はそんなに無いのが実情である。調査カード、調査日誌、写真等の整理は、調査地の宿でだいたい済ませたとしても、いよいよ報告書としてまとめる作業が残っているからである。しかし、調査地から持ち帰った分類済みの調査資料さえうまく利用できれば、報告書作成への方向性や構成はある程度定まっているはずである。

＜図3＞調査報告書の例 サイズ A4



＜図3＞の例は、報告書を書くためのとりあえずの概念図であって、実際は、日誌や調査者の分析的観点を交えながら書くことになるだろう。調査カードは調査資料の提示として記述することなので、カードそのままではなく、情報伝達の原則を守りつつも自分の文章にしていく。写真も基本は変わらないので、調査カードだけの3枚をベースに書くか、または＜図3＞のように、カード2枚と写真1枚をベースに書くかについては、調査者が判断する。判断の準拠は、調査テーマや構成、または報告書の展開によるものである。

5-2. 話者への礼状や倫理問題

調査地でお世話になった人々への礼状は忘れてはならない。昔は必ず葉書を送ることにしていたが、最近では一緒に撮影した記念写真だけをおくるか、またはメールで葉書の代わりにする人もいる。また、さらに重要なのは、調査地でいろいろ協力してくれた大学や団体があるならば、出来上がった報告書を郵送することである。そうすることによって、それ以降の補足調査をはじめ、いろいろ予想される交流にも大きく寄与するからである。

ところで、繰り返すことになるが、調査という仕事をしていると、さまざまな個人情報に対する知識が一つ二つ増えてしまうのは避けられない。調査の為にはとても役に立つことであるが、調査をさておいて考えれば、それが原因で厄介なことになることもある。現地の人々同士の人間関係に徐々に巻き込まれることもあるからだ。調査が深くなるほどこのような危険性が付きまとうので、人類学者や民俗学者というのは、時間が経つに連れ、その神経戦でだいぶ疲労を体験することになる。それと同時に、やはり現地の人々とのあいだで交わされた約束事も守る義務があるし、現地人のプライベートな話の取り扱いにはくれぐれも注意しなければならない。

6. 今後の課題

これまで述べたように、現地の人々との人間関係の形成は、彼らに対する影響の始まりである。調査のためにはやむを得ない関係であると同時に、現地への余計な介入の始まりでもあるので、そこを越えないための努力は出来る限りしなければならない。人間関係だけでなく、異文化の地域社会への伝播にも注意を払う必要がある。調査者にとってはずっと背負わなければならない課題であろう。

なかでも特に近年問題視されているのは、商業主義との癒着関係である。調査者、被調査者を問わず起こっており、例えば、調査者は調査で分かった情報をもって本を出版したり雑誌に投稿したりするし、被調査者は調査者を利用して例えば観光商品への可能性を打診したくいろいろ接近してきたりする。どちらも、地域の情報を生かした地域活性化に関心が高いので、それに連動して、地域の調査内容は文化コンテンツのような新しい概念に相応しく、再構成されてしまうことすら起こっている。最近よくいわれる急激な文化変容も、実はそのような調査活動が最初のきっかけを与えたケースが少なくない。自然体の文化を人工のものにするのに、調査者の知識が動員されたからである。

他にも、課題として考えなければならないことは多いが、そんな中でもフィールドワークを行わなければならない理由については冒頭で説明したとおりである。調査方法を含めて思考方法の練磨のためにも、フィールドワークが抱えている諸問題をこれからも引き続き検討していく必要があると思っている。

参考文献

- 片茂永編『口述史調査報告書』(1)愛知大学国際コミュニケーション学会,2003年3月.
片茂永編『口述史調査報告書』(2)愛知大学国際コミュニケーション学会,2004年2月.
国際コミュニケーション学部『韓国フィールドワーク報告書』(7)2012年3月.
国際コミュニケーション学部『韓国フィールドワーク報告書』(8)2013年3月.
国際コミュニケーション学部『韓国フィールドワーク報告書』(9)2015年3月.
片茂永「大学教育としてのフィールドワークの方法と実践」『文明21』第31号,2013年.